

讚美歌21 454

EG 369

M/T: Georg Neumark

1. 愛する神にのみ 依り頼むものは
苦しみの時にも ふしぎに守られ、
岩を土台とし 建つ家のような。
2. この悩み苦しき、誰が知るのだろう。
この痛み嘆きを 誰がなぐさめよう。
むなしく重荷は 増えていくばかり。
3. しかし主の恵みは 私たちに満ち
安らぎを与えて 摂理をあらわす。
選ばれたものに ふさわしく生きよう。
4. 喜びの日を主は 備えてくださる。
その日を待ち望み まよいを退け、
み心を信じ み旨に従おう。
5. 苦しみの中にも 神は見はなさず、
ふところに抱いて 良いもので満たす。
進みゆく道を 神は祝される。

6. み手に導かれて全ては正され、
力を誇るものみ前におののく。
私たちの主は 正義の礎。

7. 歌と祈りささげ 主の道を歩もう。
祝福を受けつつ 新たに生かされ、
見捨てることない 神に依り頼もう。

1 Wer nur den lieben Gott lässt walten und hoffet auf ihn
allezeit, den wird er wunderbar erhalten in aller Not und
Traurigkeit. Wer Gott, dem Allerhöchsten, traut, der hat auf
keinen Sand gebaut.

2 Was helfen uns die schweren Sorgen, was hilft uns unser
Weh und Ach? Was hilft es, dass wir alle Morgen beseufzen
unser Ungemach? Wir machen unser Kreuz und Leid nur
größer durch die Traurigkeit.

3 Man halte nur ein wenig stille und sei doch in sich selbst
vergnügt, wie unsers Gottes Gnadenwille, wie sein
Allwissenheit es fügt; Gott, der uns sich hat auserwählt, der
weiß auch sehr wohl, was uns fehlt.

4 Er kennt die rechten Freudenstunden, er weiß wohl, wann es
nützlich sei; wenn er uns nur hat treu erfunden und merket
keine Heuchelei, so kommt Gott, eh wir's uns versehn, und
lässet uns viel Guts geschehn.

5 Denk nicht in deiner Drangsalshitze, dass du von Gott
verlassen seist und dass ihm der im Schoße sitze, der sich mit
stetem Glücke speist. Die Folgezeit verändert viel und setzet
jeglichem sein Ziel.

6 Es sind ja Gott sehr leichte Sachen und ist dem Höchsten
alles gleich: den Reichen klein und arm zu machen, den
Armen aber groß und reich. Gott ist der rechte Wundermann,
der bald erhöhn, bald stürzen kann.

7 Sing, bet und geh auf Gottes Wegen, verricht das Deine nur
getreu und trau des Himmels reichem Segen, so wird er bei dir
werden neu. Denn welcher seine Zuversicht auf Gott setzet,
den verlässt er nicht.

「イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。……持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。」

先週公表された、筑波大学の倉橋教授の研究グループによる疫学的シミュレーションによれば、感染力の高いコロナ・ウイルス変異株の影響力が高まるなか、日本では、5月中旬頃をピークとする「第4波」の感染が生じると予測されています。

また、医療従事者や高齢者について、十分なワクチン確保と接種が進まないなか、国内生産も早まらないなかで、「第5波」の感染ピークが10月から11月に生じると予測されているのです。

しかし、これらは予測であり、それが不可能な「宿命」ではありません。私たちには、少しでもあっても、「運命」を変えることができるはずであり、だからこそ、私たちは自分の頭で判断し、自ら行動しなければならないのです。運命を早々と甘受したり、神様の御心だと信じ、人間にあたえられた知性を用いないことは、危険です。知性を用いないのは、人間が人間であることを、放棄することではありませんか。私たちは、しっかり知性を用いているのでしょうか。

では、本日お読みした聖書の語る「天の御国の奥義」とは何でしょう。それは、この世界がどこに向かっているのか、私たちの運命はどのような道をたどるのかをいう、神様の隠された御旨を意味するかもしれません。

神様の思いは人間の思いより、「はるかに高い」ところにあります。そこで、イエス様は、多くの人々に「譬え」を用いて話さなければなりません。その理由として、「持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうから」と言われているのです。

マタイによる福音書の13章12節は、「マタイの法則」と呼ばれ、欧米の経済学の教科書にも出てきます。概ね、経済格差の拡大又は市場の大きな部分を占有する企業の支配的な地位の獲得として、語られるのが通例です

しかし、神様の御旨は、一国又は民族の苦難や滅亡、あるいは、人類の存亡を左右するような言葉であるかもしれないのです。こうしたイエス様の言葉を理解できないのは、人類社会で格差が一層拡大し、人々の心が分断されているからということになります。

新型コロナウイルスの感染リスクと、1年以上も戦い続けている今になって思い当たることがあります。このパンデミックが起こらなかったら、世界経済は、暴走を続けるように拡大を続け、環境破壊や温暖化の動きは停まることなく、国境を超える人の移動も歴史上ない規模に達したかもしれません。その結果、森を追われ、殺戮された動物から人間に転移したウイルスはパンデミックを繰り返すかもしれないのです。

実際、多くの経済学者は、意識するか無意識かにかかわらず、経済成長が永遠に続くことと、企業は利益を最大化し、個人も効用を最大化するために生きることを前提に議論することに慣れすぎています。コロナ危機があっても、ワクチンが普及し、個人の経済的利益を追求できる世界に戻れると信じている人たちが、なんと多いことでしょうか。

しかも、昨年来、先進国を中心とする、前代未聞の金融緩和と、巨大な経済対策の発動への期待から資産価格が上昇し富の格差は一層拡大していることが明らかになっています。

加えて、デジタル化という技術革新の波に乗った人々や産業と、これを享受できない場合でも所得格差が広がります。

さらに、アジアでは、1億人以上が仕事を失ったとされ、働く日知たちも、感染リスクを回避できる人と、リスクの高い業種や職業に従事する人や体調不良でも働かなければ生きていけない人では、格差が一層拡大していると指摘されています(UN, ADB 2021)。

現状を維持することで多くの利益を得る人たちと、現状の中で悲惨や困難を被らなければならぬ人たちがいるために、人類社会は、起こっている危機の真の意味を理解しないのです。

グローバル化が進んだ世界では、石油危機、通貨危機、バブル崩壊、巨大災害にくわえ、今回のような感染症を、10年ごとに何度も経験しました。

国際経済学では、こうした危機を、経済システムの外からのショックと考えて、「非対称的 (asymmetric shock)」と命名しています。これは、複数国の間で通貨圏を形成する場合、それが、「最適通貨圏」になり得るかどうかを判断する基準の一つとなっています。

外的ショックが「非対称」であるとは、その影響は、国や地域、産業などによって大きな格差を生むということです。しかも、ショックの前から、それぞれの経済社会に存在する脆弱性 (vulnerability) に作用し、経済格差が拡大するのです。

マタイによる福音書が語る「持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまう」は、非対称的なショックと経済社会の脆弱性を踏まえ、経済学によって説明することができるのです。

経済学を専門とする私たちにとって大事なことは、これから起きるショックの可能性、経済社会の脆弱性を理解して、将来を予測する努力を怠らないことと、これを運命として受入れてしまうのではなく、将来の世代のためにも、現在できることから、真剣に行動に移すことです。イエス様のみことばは、経済学に、そのことを求めているはずです。